

募集期を逸した事も、又前後通じて五回の募集をしたのにも不拘投稿数の非常に少なかつた事も又確かにその一因である、此は會員諸君の自尊心が深くなつた爲めかも知れぬ、然し吾々は未だ修養の道中に在るのだから、その論説や修辭の完全を期する事は勿論出來ない、唯吾々は現在の吾々としてベストを盡し眞なりと信する處のものを披瀝すればそれで充分なのである、周圍からの批評を恐れて居るやうではその發展は望まれぬ周圍よりの正しき批評それは吾々の大に望む所ではなくてはならぬ、それは寧ろ我々の思想や文章の練磨の砥である。

二三年の後には又此の棲神の復活を見るであらうその時には競つて投稿せられそして此の棲神が内容形式の両面に於て祖山文書の精華として恥かしからぬ迄に發展せん事を祈つて止まぬものである。

(大正十二年六月三十日羽水記)

## 關西地方修學旅行記

六月三日 晴天 身延出發

白雨一過して蔚蒼たる綠林翠樹は綠愈よ深ふして幽

致清淑涼味掬すべき季に吾祖山の健兒一行五十名は小川猪口兩教授引率の下に修學旅行の途に就く。午後三時一同精神閣前に集合し法味を獻じ道中の無事を祈り教頭猥下の訓示あり殘留生一同に見送られて身延驛に向ふ。午後五時身延驛を發し愈よ車上の人となつた一行は、窓外に展開されて行く自然の美、殊に夕靄にかゝりて雲表に聳ゆる富士山の雄大さと水聲潺々として流るゝ富士川との天然の風景を稱しつゝ程なく富士驛にて東海道線に乗り換へ靜岡着、時に午後九時四十分なりき。

六月四日 晴天 伊勢より奈良へ

午前二時十五分靜岡を發す、闇を破る音響と共に列車は進行する、多くの旅客の中には肱枕にて眠る者、談笑する者千姿萬態なり、朝七時名古屋に着更に參宮線にて山田驛着、驛頭に玄題旗を樹て、我等旅行隊を歓迎せるあり、是れ山田市常明寺の大橋憲孝師及び其の信徒諸士なり、一行は歡迎者一同の案内に依つて常明寺に入る、當寺は聖祖嘗て伊勢大廟に三大誓願を奏言し給ひし靈蹟なり、寶物等を拜觀し尙晝食の饗應を受け正午大橋師の同道にて外宮に向ふ。外宮に詣ずる幾多の人々は何れも神境の靜寂な

るに襟を正さざる者はない、一行は神前に進み額く  
事暫時。此れより内宮參道に進む、六丁にして誓願  
井戸と云ふあり聖祖大願を以て大廟に詣せられし時  
一百日間苦修鍊行し給ひし靈蹟にして當時の井戸今  
尙現存せり、近く此の井戸の上にそが記念塔を建設  
する由を聞く、吾等は此の靈蹟を拜して漫ろに六百  
七十有餘年の昔を回顧し感懷無量たらざるを得な  
い。更らに進みて宇治橋に至る、橋は流れも清き五  
十鈴川に架せられたり、橋の中央に竹めば四隣寂と  
して聲なく靈氣肅然として充つ、一行は五十鈴川の  
流れに口を嗽ぎ手を洗ひ敬虔の誠を持して御苑に入  
り、正面の石段を上りて神前に詣て法味を捧げ皇運  
國威の隆盛を祈る已つて神殿を拜せば總べて白き丸  
木柱にて建築せられ奥の本殿の棟に處々金の金具の  
光るは一層壯嚴な感じを興える、我等は御苑を拜觀  
し自ずと西行法師の

何事のお在ますかわ知らねども

かたじけなきに涙こぼるる

の匂と本化聖祖の廟參の時を思ひ浮べ思慕の情に堪  
えず、等しく靈感に觸れざるなく黙々として語なし、  
辭して二見ヶ浦に赴く。二見ヶ浦の海邊は白沙青松

碧波と映帶して景色稱するに勝へたり、殊に奇なる  
大小兩岩に七五三繩の長く張りたる形こそ何物にも  
渝へられぬ麗しき眺めなりき。一行は海岸に憩ふ事  
暫時にして二見ヶ浦驛に至る此處に於て同道を得た  
大橋師に一同感謝の意を表し別れて吾一行は再び汽  
車中の人となり、午後九時奈良驛に着、月の家族館  
に投宿す。

六月五日 曇 南都見學

早朝夢を破られて目を明くればホテルの窓外に南都  
の風致初めて開展さる。朝食後一行はホテルを出で  
昔も變りなき三條通りを歩みつ興福寺境内に至る、  
興福寺は法相宗の大本山にして千二百年前奈良の都  
と共に創立せられたるものにして今は五重塔三重塔  
東金堂花の松南圓堂等の殘存して昔日の盛時を偲ば  
しむ。惟ふに南都に於ては古代佛教界の權威たる南  
都六宗の寺院は現在も尙は興福寺東大寺西大寺藥師  
寺唐招提寺等何れも雄大なる堂宇を存すと雖も此等  
の全部は全く信仰的方面より見れば唯哀れにも殘骸  
を留むるのみ、我等は此等の堂塔を見て奈良佛教の  
全盛時代を想像し更らに死せる奈良佛教を現觀して  
轉た今昔の感に堪へざるものありき。興福寺五重塔

の右より優美なる石梯六十一段を下れば猿澤の池あり是れより春日神社に通ずる兩面の廣々たる芝生は奈良公園なり鹿多く或は樹の蔭或は池の邊に散在して人を迎ふ。春日神社の境内には無數の燈籠左右に並列す、一行は社前に法味を捧げて神社の南門より二月堂三月堂手向山八幡等を巡拜して三笠山の麓に出づ、若草山は名の如く山全體若草を以て覆はれ山上の眺望も亦良し、麓に暫く憩ひ東大寺の大佛殿に詣り一同巨大なる盧舎那佛の像を拜觀し更に博物館に入り古代の佛像佛塔佛畫を拜觀して奈良朝時代の藝術の發達を偲ぶ。其の他諸官社等を見學して、最後に日蓮聖人寄寓の靈場蓮長寺に聖祖修學の當時を偲び奉り午後一時法隆寺に參詣し、聖德太子の佛教興隆に努めさせ給ひし事蹟を追憶し、且つ古建築の佛塔及び金堂上御堂夢殿其の他寶物の數々を見學し聖德太子及び其の周圍の人々の信仰の大體を知る事を得しは殊に吾等宗教家としては一層意義ある事に思はれき、法隆寺を出で汽車にて京都桃山驛に至る。桃山は昔秀吉以來史實に富める處長くも明治天皇此の地の景勝を愛せられし結果、此所に英靈を鎮め奉りしなり、大帝の御陵墓は舊桃山城本丸址に昭憲皇

太后の御陵は名古屋丸の址に在せり下りて亦乃木神社有り御跡慕ひて我は行くなりと遺詠して自刃せる將軍の靈は永久に御陵近く奉仕するを得て満足ならん。兩御陵及び乃木神社に詣でたる我等は明治聖代の恩徳と乃木將軍の無二の忠節を心に思ひ浮べつゝ、再び汽車にて京都驛に至る、先づ法華俱樂部に旅装をどき一息つきしは午後六時なりき。

六月六日 曇 京都市内見學

京都は紀元一四四四年の延暦十三年桓武帝の都し給ひてより明治初年迄一千餘年間皇居の地にして今日尙ほ御即位の大儀は京都に於て行わせらる、亦平安時代よりの佛教文學、美術等今に至つて尙ほ且つ昔の面影を残せるもの少なからず。殊に本宗に關しては永仁二年日像菩薩帝都開教の發端、及び日靜上人鎌倉名越より今の太光山本國寺を京都に移轉せらるる等を始めとして妙法の西漸は遂に今日見るが如き盛大を呈するに至れり。先づ本國寺に參詣す、當寺は前述の如く日靜上人鎌倉より移されたる寺にして有名なる三箇の重寶の隨一宗祖隨身佛立像の釋尊を奉安せり、其他太光山の靈寶等全部拜觀する事を得且つ亦當本山及び光山學院生諸君は吾等祖山旅行隊を

歓迎し當日特に歓迎茶話を催し長尾僧正より親しく歓迎の辭を戴きしは感謝に堪へず、一行は本國寺より明德女學校を見學更らに二條離宮に赴き維新の大政奉還の時を追想しつゝ西陣に至り、管公を祀れる北野天満宮及び足利義滿が豪奢を極めし燕居の地たりし金閣寺に至る然して三層の樓閣其の他當時の粹を極めたる美術的寶物等を見學し道を北にとりて四海唱導妙顯寺に着く、當寺は後醍醐帝の勅願所にして日像上人の開基本宗洛北發軔の道場たり當山の靈寶玄旨本尊宗號の繪旨等を拜觀し日像上人の三黜三赦の弘通を偲ぶ、特に當山主の厚意により龍華文庫を見學し己つて、村雲瑞龍寺門跡に詣ず、當御所は後陽成帝の勅願所にして豊公の姉日秀尼の開創たり。次に東山方面に向ひ先づ御苑に入る御苑の中央に御所あり是れぞ桓武帝以來永年皇居たりし所にして明治初年車駕東遷せられ御所を別宮とせられたれど古姿大號を舊時のまゝに存せらる尙ほ東して西身延祖山歴代圓教日意上人開基なる本山妙傳寺に參詣し、それより少しく歩みて岡崎公園に至れば平安時代を偲ぶ平安神宮在り、平安奠都千百年祭に際し新に桓武帝の神靈を奉祀せらる、其の祠前に碧瓦丹塗

壯麗なる建物の並べるあり、之れを大極殿と云ふ、其の他武徳殿インクライン及び今上帝の御即位式の記念物たる公會堂等を見學し遙かに南禪寺の三門を望みつ應天門より眞直ぐに道をとれば淨土宗鎮西派の總本山智恩院に至る、境内宏大にして堂塔觀るべきものあり、尙ほ右すれば泉石の美を極めたる圓山公園に出づ更らに進みて東大谷高臺寺等を経て八坂五重塔を見清水寺に向ふ、清水寺は大同年間坂上田村麿の創建にかゝる名刹にして規模宏壯を極め就中南面の舞臺は古來頗る名高く其の下に音羽の瀧あり、瀧より裏山の密林を辿りて本國寺の茶毘所たる東山法華寺に參詣當寺は日靜上人の開基なり、一行は任職の歡待に依り暫時休息し三十三間堂博物館等を経て真大本山東本願寺及び西本願寺に至る何れも堂塔伽藍頗る雄大に且つ亦詣ずる者甚だ多し、一行は何れも彼れ等宗派の迷へる信仰が如何程迄人心の奥底に食ひ入れるかを想像して又心慨に堪へざるものあり。斯くて本日の見學も終へて午後六時俱樂部に歸着

六月七日 晴 比叡山及び近江見學  
早朝俱樂部を出發し市内三條大橋より京津電車にて

大津に入り更らに鐵道にて叡山驛に至る、叡山町より延曆寺本坊の境内を過ぎ比叡山登り口に向ふ道は廣く兩側に芝草生ひ茂り樹木並び樹ち、處々に石燈籠の配置せる趣き先づ裝嚴の氣あり、登り口より二十五丁の坂道あり、漂々たる琵琶湖の青空に連るを顧視しつゝ、坂路を辿る、坂は急にして折々秀峯峻嶺の間に古松老杉鬱鬱青々として清涼の氣一山に滿ち亦見るべきあり、一行は漸く根本中堂に登り着く山上の茶店に休息し根本中堂の内陣を拜す、幸に延曆寺の僧より比叡山につきての説明を得たり、當山は天台宗總本山にして桓武帝の勅願に依り傳教大師の開創にして延曆四年大師始めて此の山に登り一乘止觀院を建立し自ら一切三禮の藥師如來の尊像を彫み之を安置す、以後弘仁十四年勅額を賜り延曆寺と名けられたり。亦比叡山は各宗の名僧等の遊學せられたる地なれば佛教界に最も深き關係を有せり。中堂より大講堂に進み一行講堂を見學する時漫ろに過去幾百年以前聖祖曾て遊學せられたる當時を偲ぶ。中堂講堂何れも宏壯を極めしものなり。講堂より戒壇院及び傳教大師廟なる淨土院其他法華堂釋迦堂相輪塔等中塔西塔の大體を見學し山路を横川にこれば

再び湖水現れ山容水色雲形樹影一として奇ならざるなく妙ならざるはなし、一行は疲勞も覺えず横川中堂元三大師堂を過ぎて日蓮上人修學の靈地定光院に到着せり、此所は極めて菰蘆の地なり、一同聖祖の墓前に踰づき讀經唱題聖人の修學當時を追憶して涙と共に側の草を掃ひ花を捧げて後古より絶えず濁なき靈水に喉を潤し周圍の靈氣に觸れて各々名殘を惜みつ山を下り途中有名なる惠心院を經へ再び比叡山町に出で傳教大師誕生の地たる生源寺に詣で坂本に至る一行は湖上を巡らんと蒸汽船に乗じ湖上を走る、甲板に立ちて琵琶湖上を望めば渺瀰として碧空に連る、時しも大風吹き來り大波洶々として恰も海の如し、船は唐崎の松を横に見て勢多橋を過ぎし時突如大雨降り來り石山に着きし時は一層激しく降りしき一同あはたしく船を捨て辛じて石山寺に至る、石山は名の如く大なる自然石を以て體となしその形甚だ奇なり、段を上れば紫式部の源氏物語を草せる跡あり亦左に觀月亭在り雨降る中にも遙かに湖を望む其の自然の美實に晴天よりも一層趣きを添へたり。石山を去りて電車にて京都に歸る俱樂部に着きしは午後七時なりき

六月八日 晴天 京都出發

去る六日の市内見學は天候の都合上市内全部を見學する事不可能なりし爲め本日午前七時より午後八時まで自由行動を取つて各自希望の處に行きて京都の氣分を味ふ。午後八時全部集合人員を點呼し同十一時一同旅装を整へ俱樂部を辭して京都驛に赴き午後十二時の列車にて光山學院學生諸君に見送られ、去り難き西の都を後に出發す、而して明れば六月九日午後四時身延に着、殘留生諸君に迎へられて共に校歌を奏しつゝ無事歸山す。一行は三門前に於て佛祖三寶に見學旅行隊の無事終了を奉告し萬歳を三唱して解散せり。

最後に謹んで今回修學旅行中歡待を辱ふせる各寺院及び信徒諸氏に對し謝意を表して擱筆す。

(以上吉川記)



## 會報

【庶務より】

茲二三年は可成り山を擧げての祝典が重つた、聖誕七百年、世界平和紀念法要、立正大師號宣下書奉戴式、其都度満山の大衆と相交つて甲斐々々しく立働いた吾學園師徒の努力は、山の歴史と俱に蓋し忘る能はざる事の一つであらう。其處に道思ひの濃厚さと、祖山愛の惻湧さどが窺はれて床しい。山卒らの文化を開いて底の底迄を敵いて進展上の雄者たらんとする聖子の睦みは何時其の望まる、世へ眞に振舞ふ事が許されるか知らし！ドウモ争ひは人生観での父であり、不満は若き人々の捨て難い情の一面の力だ。大正十二年……其れは開祖御入山六百五十年の奉祝會の秋であつた。一年の経緯から繰出さるゝ本會の精果は如何に纏られしか、別に詳細に亘る事は年内逐次身延教報誌上に擧げた事故、又紙數の許さない、所でもあれば茲には大要の事件を記して以つて一般への感謝と、希望とに及ぼう。

## 昨年度の會報に次で

十一月十日……前身延教報記者黒澤松雨氏の編輯「立正」の創刊に際し寸志を表して祝す

一月五日……本院生親睦福引會執行太田文學部幹事此に當る

一月十五日……哨章改正の件中以五以上集合して協議確定、同學會準備委員として結城瑞光君江原亮勇君渡邊泰深君松田文逸君等々推選す。

二月十六日……宗祖降誕會例年に比し異りし事なし夜間學生劇稽